ばあちゃんのほめ言葉

沖縄県立開邦中学校三年　金城　陽詩

「ひなちゃんはすごいねぇ。ばあちゃんがおんなじ年の時は、そんなことできんかったさあ。」

私には、今年九十歳になる曽祖母がいる。曽祖母は年齢の割りに元気な人で、私は曽祖母の家に行って、色々な話をするのが大好きだった。学校の話や勉強の話、部活動の話。そんな他愛のない話をする度に、曽祖母はいつも私をこんな風にほめてくれる。

私はそのほめ言葉を、今までにたくさんもらってきたほめ言葉のうちの一つ、というように軽く受け取っていた。

しかし、数年前のお盆の日、私のその言葉の捉え方は変わった。私がいつものように曽祖母と話をしていると、テレビからは憲法九条改正についてのニュースが流れてきた。曽祖母は、今まで話していた時の笑顔とは全く違う、とても真剣な表情で、そのニュースを見始めた。そして、「ならんどお。戦争は絶対にならん。」と独り言のようにつぶやいた。聞こえるか聞こえないかほどの小さな声。それでも、その声は力強かった。沖縄戦という地獄を生き抜いてきた曽祖母の心から訴えだった。私は思わず、

「ばあちゃんは、戦争の時どうだったの。」

とたずねた。今まで私も曽祖母もあまり触れてこなかった話題。曽祖母は、このとき初めて自分の戦争体験を詳しく話してくれた。その話を聞いて、私はやっと曽祖母がいつも言ってくれていた言葉の「本当の意味」を知ることができた。

一九四五年四月。沖縄の綺麗な青い海と空は、突如として米軍の軍艦と爆弾で真っ黒に染まった。沖縄戦の幕開けだ。曽祖母は当時まだ十四歳であった。しかし、毎日防空壕を掘ったり食料を確保したりして、ひたすらに米軍からの攻撃に備える日々。今のように楽しく学校へ行って、勉強や部活をしている場合ではなかった。自分の住む町が一瞬で火の海になった。逃げ隠れた先の馬小屋に空から爆弾が降ってきた。その爆弾で一緒にいた叔父が死んでしまった。さらに南へ逃げる途中で、数メートル先にいた祖母が銃に撃たれて死んでしまった。気づけば周りに家族は誰もいなくなっていた。そんな私たちには想像もできないような状況も、曽祖母は全てその目で目の当たりにしてきた。いつしか、もう少しで自分も死ぬのだと、死さえも恐れなくなっていた。私と同じ十四歳という年齢で。私たちがたくさんの文字が並んだ黒板を、友達のはじけるような笑顔を、この瞳に映しているような瞬間が、曽祖母にはなかった。私たちが今過ごしている「青春」という時間は、第二次世界大戦に、そして沖縄戦にうばわれた。

「ひなちゃん、どんなことがあっても戦争は絶対にならんどお。ばあちゃんたちみたいにどんなに勉強したくてもできんくなるからねぇ。」

曽祖母はいつになく真剣な眼差しで私に言った。私の目からは幾粒もの涙が流れていた。曽祖母のこんなにも悲惨な体験を詳しく聞こうとしてこなかった申し訳なさや、自分がおかれているこの環境の有り難さも分からずに過ごしていた申し訳なさなど、色々な感情があふれて止まらなかった。

まだ小学生の頃の私は、分数がわからないから教えてほしいという曽祖母に向かって、

「ばぁちゃん、そんなのもわからんわけぇ!?」

などと言っていた。そんな普通なら怒られてもおかしくないようなことを平気で言う私に対して、曽祖母は、

「ばあちゃんは勉強があんまり得意じゃなかったからねぇ。もう難しいことは忘れちゃたさあ。」

と笑顔で返していた。しかし、曽祖母は「勉強しなかった」のではなく、「勉強できなかった」のだ。曽祖母は、学生時代に学べなかったことを、八十代になってから自らで少しずつ学ぼうとしていたのだ。その事実を知った時にはもう何年も経っていて、ひどいことを言ってしまったことを直接謝れていない。でも、私は今だからこそ声を大にして言いたい。私は、こんな曽祖母のひ孫として生まれてこれたことをすごく誇りに思う。

どんなにしたくてもできなかった「青春」。もう一度見たくても見ることのできなかった綺麗な青い海や空。そんな人たちが、七十五年前、この沖縄にたくさんいたことを忘れないでほしい。私たちと同じ年頃で生と死の間を生きなければならなかった人たちがたくさんいたことを忘れないでほしい。今あるこの生活がとても幸せであるということを絶対に忘れないでほしい。そして、もう二度と誰の瞳にも戦争という地獄が映らぬように。「青春」という人生においてかけがえのない時間がうばわれぬように。私は、七十五年前沖縄戦という地獄を生き抜き、命を分け与えてくれた曽祖母の心からの訴えを世界中の人たちに伝え続けたい。

「どんなことがあっても、戦争は絶対にならんどお。」